

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02364

研究課題名(和文)アマチュア合唱団表現力向上プロジェクト～J.S.バッハ声楽作品を題材に～

研究課題名(英文)A project to improve amateur choirs' expression - J.S. Bach's vocal works as a subject

研究代表者

小原 浄二 (OBARA, JOJI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授

研究者番号：80274348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、バッハの声楽曲における言葉の色彩感の表現方法、旋律を美しく保ちながらのアーティキュレーションの考え方、拍節感と和声感から導かれるパートの響きと役割に焦点を当て練習プログラムを検討、合唱参加者を一般から募り反復的に試行した。以上の活動により、参加者のドイツ語に対する意識は大きく向上し、また各パートの旋律の意味の理解と、アーティキュレーションの選択の幅を広げることとなった。更にバッハ特有の軽快な歯切れとテンポ感の向上へと繋がった。アマチュア合唱団が今後バッハ演奏をどのように受容していくべきかを声楽的見地から導き出すという本研究の目的をおおむね達成できたと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国ではアマチュア合唱団がバッハの作品を演奏する際に、その声楽的な困難さ故に、表現願望や意欲はあっても、音楽を演奏することの本質とは別の目的を与えることにより各々の活動を自ら納得させるという例は少なくない。

だが、美しくバッハの合唱を歌い、テキストの内容を深く表現したい願望を持ちながらも、声の大きさや豊かさのみの追求や、演奏様式のみ焦点を当てた学術的な活動に陥るとすればそれは憂慮すべきことである。

本研究成果はバッハの声楽曲を歌う上での技術的な諸問題を市民レベルのアマチュア合唱団の視点に立って解決させ、今後も本来の意味でのバッハ演奏の意義を見出すことの助けとなることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop an effective practice program for amateur choirs playing Bach's vocal works. We focused on methods of expressing the colorfulness of words in Bach's vocal music, the concept of articulation while keeping the melody beautiful, and the sound and role of the parts derived from the sense of time and harmony. We had practice every week with choir members with different skills and experiences. As a result, participants gained a deeper awareness of the German language and better singing skills through the activities. In addition, they understood the meaning of each part's melody and expanded their articulation choices. Furthermore, the choral performance to express Bach's lightness, crispness, and tempo characteristics improved significantly. In conclusion, we have achieved the objective of this study, providing amateur choirs with a perspective from a vocal point of view to interpret Bach's music better.

研究分野：声楽

キーワード：J.S.Bach カンタータ アマチュア合唱団 表現力向上 演奏様式

1. 研究開始当初の背景

我が国には「合唱指揮者」と呼ばれるいわゆる合唱のエキスパートとされる指導者が存在し、アマチュア合唱団に対して、また講習会等において多様な指導が行われている。それは、曲の構造を分析することから、作曲家の生きた時代背景や音楽の様式、発声に関することまで多岐にわたっている。

多くの場合はそれらを自らの合唱経験から得られたものに大部分を委ねているが、バッハの声楽作品に関して言えば、他の合唱曲あるいは独唱曲を歌うことよりも声楽的な知識と技術、また作曲当時以来受容されてきた演奏スタイルについての正しい認識が必要不可欠であり、それを伝えるためのより健全な環境が求められる。

本研究は、市民レベルのアマチュアであっても、声楽的見地に基づいた正しい判断のもとでの歌唱を繰り返すこと、またそのことを実現させるために年単位の十分な時間をかけること、モダン楽器、オリジナル楽器双方での演奏を音楽ホールや教会など異なった様々な環境の中で経験することなどで、プロフェッショナルのように限られた短い期間での取り組みの中では成し得ることのできない、新たな演奏スタイルを確立すべくこのプロジェクトを開始した。

2. 研究の目的

昨今の日本の合唱事情について言えば、その技術力は著しい進展を遂げているように見える。一方で難解な曲を歌う時、その複雑さ故に音を正確になぞただけで満足してしまう例は多々あり憂慮すべき問題である。1950年以降世界的にバッハ研究は著しい発展を遂げ、その演奏もこの60年余りで様々とスタイルを変えながら受容されてきた。この間、日本でもプロ・アマを問わずバッハと名の付く演奏団体、特にカンタータや受難曲を歌う合唱団が全国に点在するようになった。しかし多くの場合、声楽的な困難さから、音楽を演奏することの本質から離れた結末に至っている。本研究では、今日のアマチュア団体がバッハの合唱曲を演奏する際に留意すべきポイントやそれを達成するための具体的な練習方法を見出し、また将来に向けてバッハ演奏をどのように受容していくべきかを声楽的見地から導き出すことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、市民レベルのアマチュア合唱団及び個人を合わせた約50名を対象に、ドイツ語のニュアンスや一語一語における色彩感を達成するために必要な練習プログラムを提示、並行して1950年以降のバッハ演奏の受容のされ方を検証し、今日におけるバッハの合唱作品の一演奏スタイルを確立すべく研究を進めた。このことを以下の取り組みの中で見出していく計画とした。

バッハ演奏の受容についての再検証

1950年代のカール・ミュンヒンガー、オットー・クレンペラー、1960年代のカール・リヒター、1970年代のグスタフ・レオンハルト、ニコラウス・アーノンクール、1980年代のジョン・エリオット・ガーディナー、トン・コープマン、そして1990年以降の鈴木雅明の演奏を、多くの録音が残る「マタイ受難曲」を中心に、旋律とリズムの関係、外声部(ソプラノとバス)と内声部(アルトとテノール)の役割、拍節内における音符の長さについて、レガートとアーティキュレーションの関係から比較・検証を行い、この半世紀の演奏がどのように受け継がれてきたのかを改めて検証することで、本研究の演奏スタイルの方向付けを行った。

ピリオド楽器を用いた現代の古楽演奏スタイルの追求

初年度の活動は、市民が合唱に参加しやすい環境を提供するためにバロックの様式感を保持しつつも演奏自体はモダン楽器を使用、ピッチは現代の A=440Hz での演奏を行った。2 年目以降は作曲当時のピリオド楽器を用い、ピッチは現代より半音低い A=415Hz に設定することで、よりオリジナルに近い姿の演奏をイメージする。当時のスタイルの楽器を用いることは奏法やテンポが変わることに直結し、当然合唱の歌い方も変化することになる。30 年度はこのスタイルでの音楽づくりを基本とし、そのことで合唱参加者がバロック時代の歌唱法や様式感を体現することを最終目標とする。このことは単に当時の演奏スタイルの学びではなく、現代における古楽演奏スタイルを追求する上での布石とする。

現代の古楽演奏での歌唱表現研究

前述の古楽演奏のパイオニアと言える演奏家達の録音の過去と現在を比べた場合、常にピリオド楽器を用いながらも音の色彩感や表現の幅が時代と共により豊かになっているのを感じ取ることができる。合唱においても以前の演奏に比べより生き生きとした表情を伺うことができる。最終年度の演奏のテーマを、時代に即した演奏様式と現代的な生命感の融合と設定し締めくくりの活動を行う。研究成果の発表は、礼拝において日常的にバッハのカンタータが演奏されるドイツ(ハンブルク)のプロテスタント教会において当地の器楽奏者との共演により行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により断念せざるを得ず、代替の会場を東京浜離宮朝日ホールとし共演者及び聴衆より意見聴取を行った。

市民参加型合唱団のバッハ演奏の取り組みの一方針の確立へ

5 年間(新型コロナウイルス感染拡大の影響で 2 年延長)の取り組みを、市民レベルのアマチュア合唱団がバッハの合唱曲を取組む上での諸課題のうち大きく次の二つ、すなわち声楽技術による表現能力の観点と演奏様式についての受容史的観点から総括し、活動の一つのスタイルとしてその方針を明示する。

練習プログラム案の検討・作成

上記の演奏スタイルの方向性を踏まえ、実践する曲目(下記記載)について言葉の持つ色彩感の表出、旋律を美しく保った上でのアーティキュレーションの考え方、歯切れのある拍節感の表現、和声感から導かれる各パートの響きの違いと役割について特に焦点を当て練習プログラムを作成した。

合唱参加者の決定

本研究における合唱参加者について、高知県のアマチュア合唱団及び希望する個人について 50 名を目途に募集を行い、今回の趣旨と計画を説明し決定した。

曲目の決定

決定した参加人数とパートのバランスを考慮の上で曲目を最終的に決定した。

練習プログラムの実践

合唱参加者にむけて練習プログラムを提示し、週 1 回のペースで実践を重ねていく。また、月に 1 度の割合でバッハの演奏スタイルに関するレクチャーを、受容史を中心に行った。

共演者の選定と演奏内容についての協議

バッハ・コレギウム・ジャパン、東京バッハ・カンタータ・アンサンブル等の国内外でバッハを中心に活動をする器楽奏者及び独唱者から共演者を選定し、本研究の趣旨の説明を行う。共演者とはテンポ、ダイナミクス、アーティキュレーション、ニュアンスなど音楽の方向性についての意見交換を行い数回にわたるリハーサルの中で徹底させた。

4. 研究成果

この研究活動を進めるにあたって、1.言葉の持つ色彩感の表出の仕方、2.旋律を美しく保った上でのアーティキュレーションの考え方、3.拍節感及び和声感から導かれるパートの響きと役割に特に焦点を当て練習プログラムを検討、参加者に提示した上で器楽奏者とのリハーサルを含め年間約 60 回の研究会において反復的に試行した。

1. 言葉の持つ色彩感の表出について

カンタータにおけるドイツ語のニュアンスを特徴づけるための色彩の表出は、それを実現するための発声メカニズムの理解が不可欠である。各研究会においては、フレデリック・フースラーによって分けられた「アンザッツ」によって発声器官に喚起される働きや、音響効果について、実際に頭頂部、前頭部、鼻根部、上顎部、歯列部などに振動を感じさせることによって検証した。その上で、1つ1つの言葉の発音はもとより、その意味を表すために最もふさわしいアンザッツの選択を試みた。また、岡崎グンヒルト氏の協力のもとで「言葉が生きること＝歌が生きること」をテーマにドイツ語の発音と表現についてレクチャーを行った。

これらのことは、ねらいの一つである「歌詞の解釈および一語一語のニュアンスを特徴づけるための色彩を重要視し、それを実現するための発声メカニズムを理解すること」、「ドイツ語を中心とした言葉の理解とその色彩を出すために必要な知識の習得」という点において、参加者のドイツ語に対する意識レベルと、言葉のニュアンスを伴った発音を大きく向上させた。

2. 旋律を美しく保った上でのアーティキュレーションの考え方

本研究では、バッハ・コレギウム・ジャパンや東京・バッハ・カンタータ・アンサンブルなど、国内外で活動を行う器楽奏者を共演者として 4 回の成果発表演奏を行ってきた。共演者には本研究の趣旨を説明し、現代におけるバッハの声楽曲演奏のあり方について、テンポ、アーティキュレーション、ニュアンスなど、音楽の方向性について意見交換を重ねてきた。研究 2 年目には BWV64 と BWV121 を取り上げたが、これらの作品は合唱四声の各パートに対しトランペット 1 本とトロンボーン 3 本が重っており、両者の関係性について演奏実践を重ねる中で理解を深めていった。弦楽器や管楽器が合唱の旋律と重なることは、市民参加型合唱団の補助的作用のみならず、各パートの旋律の意味と、どのようなアーティキュレーションで演奏すべきかの選択の幅を広げることに繋がった。

3. 拍節感及び和声感から導かれるものについて

研究当初、このプロジェクトのために集まった合唱メンバーには、国内で活動を行う他の多くの団体に属する個人に見られるような、「声の豊かさのみを追求する」、「内面の表出を殊更に重要視する」、「知識が先行し演奏様式のみ焦点を当てる」傾向が少なからず見られた。

この研究期間の中で拍節感と和声感から導かれるパートの響きと役割を意識し音を出すことを繰り返し実践したことは、合唱においてバッハ特有の軽快な歯切れが生みだしテンポ感の向上へと繋がった。この傾向は最終年度の研究会における BWV182 及び BWV233 の実践において特に顕著となり、「時代の即した演奏様式と現代的な生命力の融合」というこの研究の核となるテーマを進める上で大いに有効であった。

すなわち、バッハの声楽曲の演奏においては、歯切れや軽快感(演奏様式)の存在が、歌ならではの旋律の美しさの表現(現代的な生命感)を自由にし、これらは対称的なものでありながら協力体制を築き音楽を形成することが実践を重ねるうちに浸透していった。

本研究成果がバッハの声楽曲を歌う上での技術的な諸問題を市民レベルのアマチュア合唱団の視点に立って解決させ、今後も本来の意味でのバッハ演奏の意義を見出す助けとなることを期待する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小原浄二/高知バッハカンタータフェライン
2. 発表標題 J.S.Bach BWV182,211,225
3. 学会等名 高知バッハカンタータフェライン第21回演奏会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小原浄二/高知バッハカンタータフェライン
2. 発表標題 J.S.Bach BWV4,64,121
3. 学会等名 高知バッハカンタータフェライン第22回演奏会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原浄二/高知バッハカンタータフェライン
2. 発表標題 J.S.Bach BWV8,39,233
3. 学会等名 高知バッハカンタータフェライン第24回演奏会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小原浄二/高知バッハカンタータフェライン
2. 発表標題 J.S.Bach BWV84,182,233
3. 学会等名 高知バッハカンタータフェライン第25回演奏会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高知 バッハカンタータフェライン (Kochi Bach Kantaten Verein)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------